

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	佐伯 慈海（兵庫県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第 86 号
学位授与の日付	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 1 項
学 位 論 文 題 目	常啼菩薩求法譚の研究
論 文 審 査 委 員	主査 森山 清徹（佛教大学教授）
	副査 松田 和信（佛教大学教授）
	副査 藤井 教公（国際仏教学大学院大学教授）

### 〔1〕論文の概要

序論	1
第1節 常啼菩薩求法譚と「常悲菩薩本生」の概要	1
第2節 先行研究	3
第3節 問題の所在	6
第1章 常啼菩薩求法譚に関連する諸経典	8
第1節 般若経の全体像	8
第2節 小品系般若諸経における常啼菩薩求法譚	10
第3節 大品系般若諸経における常啼菩薩求法譚	17
第4節 十万頌般若経における常啼菩薩求法譚	24
第5節 『六度集経』における「常悲菩薩本生」	25
第2章 常啼菩薩求法譚の原型の成立時期	27
第1節 『六度集経』「常悲菩薩本生」との関係	27
第2節 モチーフによる検証	31
第3節 菩薩の階位による検証	32
第4節 経巻供養による検証	34
第5節 成立時期の比定	45
第6節 大乘仏教興起との関係	46
第3章 常啼菩薩求法譚比較対照表	53
第4章 常啼菩薩求法譚の完成時期	75
第1節 比較対照表の検証	75

第2節	完成時期の比定	84
第5章	常啼菩薩求法譚の欠落	87
第1節	問題の所在	87
第2節	三智による比較検証	89
第3節	常啼菩薩求法譚以前の章との整合性	104
第4節	形態的特徴	106
第5節	欠落の理由	106
結論		110

序論においては常啼菩薩求法譚の概要と先行研究について述べ、そこから明らかになる問題点として小品系般若、小品系般若、十万頌般若を俯瞰した研究がなされていない点を挙げた。第1章では検証の基盤となる般若経自体の情報を整理し、般若経における常啼菩薩求法譚の有無とその理由を経録等を用いて調査した結果を述べた。第2章では菩薩の階位や経巻供養の検証をもとに『六度集経』（以下『六度』）「常悲菩薩本生」（以下「常悲」）と常啼菩薩求法譚の関係を検証し、常啼菩薩求法譚の成立時期を明らかにした。第3章では全ての常啼菩薩求法譚の比較対照結果を一覧表に示した。第4章では第3章で示した比較対照表に基づき、常啼菩薩求法譚の完成時期を探った。第5章では十万頌般若の古層たる梵本・蔵訳十万頌般若に常啼菩薩求法譚が存在しない理由を探った。以上の検証結果を、結論では＜常啼菩薩求法譚自体についての知見＞＜垣間見られた大乘仏教興起に関する知見＞としてまとめた。

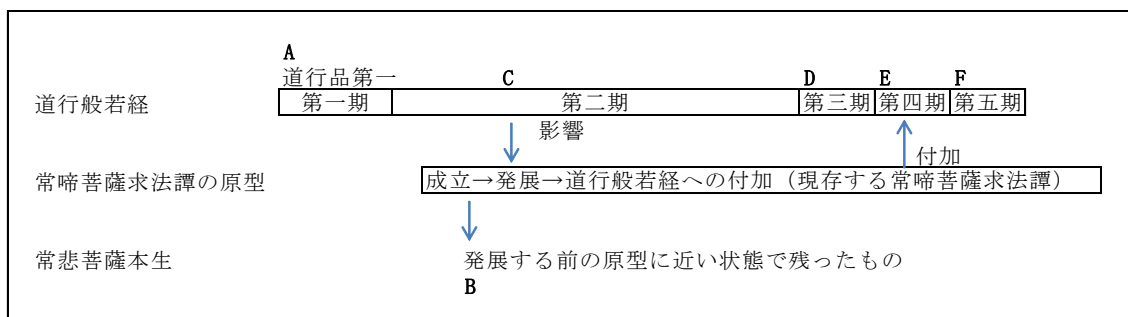
#### ＜常啼菩薩求法譚自体についての知見＞

1. 常啼菩薩求法譚は『道行般若経』（以下『道行』）の「道行品第一」が成立して以降、「功德品第三」で舍利供養との合流がなされるまでの期間にその原型が成立したと考えられる。
2. 『放光』以降の常啼菩薩求法譚に構造上大きな差異がないことから、常啼菩薩求法譚の構造は『放光般若経』（以下『放光』）において完成したと考えられる。また、スプーティへの説示や法上菩薩の五欲具足といった本生談にそぐわない項目を除けば、『道行』『大明度経』（以下『大明』）の前半の構造は『六度』「常悲」に近いことも第3章の対照表から明らかである。これらの状況から、『道行』『大明』の常啼菩薩求法譚は大乘の本生経類から般若経の求法譚として構造が整うまでの中間形態という位置付けが相応しいとした。
3. 小品系般若と小品系般若の最古層の経典に常啼菩薩求法譚が存在するにもかかわらず、十万頌般若のみ最古層の経典に常啼菩薩求法譚が存在しない理由について、a) 二万五千頌般若の段階で、それ以前の品との間で智慧の法相を異にする求法譚は十万頌般若への増広が完了した時点で一体化した嘱累品と共に切り離され、この時点の十万頌般若が梵本・蔵訳として残された。その後、『大般若波羅多經初会』（以下『初会』）の原本編纂者は十万頌般若に常啼菩薩求法譚が存在しないことを不自然と感じ、三智の不備を解消した上で再付加した。b) 般若経は紀元後300年から500年に「教説の綱要化と韻文化の時期」を迎え、般若経の主流は『金剛般若経』『善勇猛般若経』『勝天王般若経』等に移る。二万五千頌から

十万頌に増広された時点で存在していた常啼菩薩求法譚が、このような大きな流れの中で十万頌般若から二次的な原因（写本の散逸や伝承途中での誤伝など）により失われ、その時期の十万頌般若が梵本・蔵訳として残された。その後十万頌般若に常啼菩薩求法譚が存在しないことを不自然と感じた『初会』の原本編纂者が三智の不備を解消した上で常啼菩薩求法譚を再付加した。以上二つの可能性である。4. 釈尊の伝記的故事の視点でこの求法譚を見直すならば、常啼菩薩が阿蘭若に入ったのは釈尊の苦行林での6年、善知識の捧げる供養の具を得るために自分の身体を売り、肉をそぎ骨を断つ常啼菩薩の姿は釈尊の苦行、常啼菩薩が自らに加えるそのような責苦を制止し、善知識に捧げる供養の具を与える長者の娘は、苦行を離れた釈尊に乳粥を与えたスジャータ、常啼菩薩を妨害する悪魔は釈尊成道前後の悪魔の襲来、常啼菩薩が繰り返し得る三昧は釈尊が成道に至った瞑想行、常啼菩薩に試練を与えるも、守護し、神変により常啼菩薩の求法のきっかけを提供する帝釈天は釈尊の宣教を促した梵天、法上菩薩が般若波羅蜜を説く前に7年間三昧に入ったのは、釈尊が成道後座禅思惟の後説法を決意された経緯と符合する。また、全ての常啼菩薩求法譚が最終的には見仏聞法を果たす。般若波羅蜜の求法はそのまま釈尊への回帰という意識が現れているように見える。このように、常啼菩薩の般若波羅蜜の求法は釈尊の成道の追体験であると同時に、仏滅後時を隔てての見仏という意味合いも持っていた。これにより、般若波羅蜜の求法自体が釈尊の成道への道と同質のものであり、自らの見仏、成道に他ならないことを意識してこの求法譚が作られたと解釈できる。

<垣間見られた大乘仏教興起に関する知見>

第2章で示した『道行』の成立過程と常啼菩薩求法譚の関係図を示す。



般若波羅蜜の書写はA期では見られず、BCEF期に見られる。A期において示されるのは聞く、学す、持す、守すという行為である。F期になると「常に持し諦に了了（明らかな様）に字を取り。諦に了了に書すを念じ、字を作すに缺減せしむ莫れ。諦に視、左右を望みて書す莫れ」と書写に対する細やかな指示もなされている。大乘運動の最初期には書写はなされずB期以降に始められ『道行』が完成する時期には書写の重要性が特に強調されるようになったことが判明する。すなわち、A期は書写が必要とされない状況にあった。BCEF期には書写が必要とされる状況にあった。とりわけF期では上記のような指示をしなくてはならない状況、すなわち衆生による書写が盛んになったと考えられる。

経巻に対して舍利供養と同様の供具による供養がなされ始めるのがC期である。この時

期の「功德品第三」の経巻供養をみると、四つの段階があることがわかった。第2段階で当時すでに普及していた舍利供養との合流がなされ、第3段階で舍利に代わって経巻を供養する根拠が明確にされ、当時すでに普及していた舍利供養との合流がなされ、従来からある舍利供養を内包しつつ経巻供養が発展していく様子が見られる。仏教徒が何とかして再び仏陀に会いたいと考えていた時代、般若経の編纂者は肉身の仏陀への憧憬を超越して仏母、法身と出会うことを衆生に教えようとした。ただし、「功德品第三」に「我不敢不敬舍利」とあるように、『道行』は舍利供養を完全に否定していない。仏母、法身へと崇敬の対象が移ったとしても仏弟子が舍利を完全に否定する理由はないのである。以前からある信仰を排斥するのではなく包容しつつ大乘仏教は確立されていったと考える。

『道行』の中で最も早く成立したとされる「道行品第一」は最も哲学的に発展整備された内容である。これを在家者だけで編纂したと考えるのには無理がある。碑文研究の成果により、B.C.2世紀には仏塔供養に出家者が参加していることが確認されている。また、仏塔の周辺の発掘で明らかになったように、仏塔は社会集団を超越的に交流させ、個々の伝統に閉ざされていた技能や知識の交換を促し、流動化させ、新たな知を生み出す場としての機能をもっていたとされる。従って、僧院内の出家者と僧院外の在家者の緩やかな連携もあったと考えるべきであろう。ギルギット出土の『法華経』『般若経』『根本説一切有部律』『アヴァダーナ』等の写本群がナウプルという地の、全く同一の経蔵から出土していた事例、スコイエンコレクションではバーミヤーン渓谷東部のザルガラーン地区の一ヶ所から大衆部文献と大乘經典が同時に出土した事例（クシャーナ王朝期（1-3世紀）のブラーフミー文字で書写された仏教梵語の *Aṣṭāsāhasrikā prajñāpāramitā* が含まれる）が報告されている。これらの事例により部派内学派として大乘仏教を位置付ける考え方が有力になる。

第4章の検証から、常啼菩薩求法譚を編纂した集団には、この世での見仏聞法が叶わないことを嘆き、自分たちが無仏の時代にあるという共通認識があったと考えられる。深山に入るも見仏聞法が叶わなかったとあるので、阿蘭若に対しても否定的と見ることが出来る。また、『道行』の段階から善知識の在家性を示す表現は存在し、『放光』以降に五欲具足を衆生を度する方便とする善知識像が明示される。これらは菩薩が社会の中にあるべきことを示したものと考えられる。

大乘仏教の興起の様子を画一的に定めることは不可能である。般若経を信奉する集団について、本論文で扱った常啼菩薩求法譚の検証から読み取ることのできる大乘運動は次の通りである。B.C.1世紀からA.D.1世紀の頃、この世での見仏聞法が叶わないことを嘆き、自分たちが無仏の時代にあるという共通認識がある時代、アビダルマの研究に没頭する既存の教団の在り方に疑問を抱く集団が、三昧による見仏を重視して『道行』『道行品第一』に現れる教理を整える。この時期には未だ「書写」は説かれない。見仏三昧に没頭することが出来、教えの伝承に「書写」を必要とせず、『道行』『道行品第一』のように哲学的に整備された内容を確認し得る環境にその集団があったとすれば、大乘運動の濫觴は僧院内部に求めるべきではなかろうか。ただし、碑文や近年の仏塔研究が示すように、大乘仏教

興起以前から僧院の出家者は舍利信仰や在家者とも関係を保っており、決して僧院に隔絶された状態にあったわけではない。従って、社会と隔絶した阿蘭若ではなく社会の中であって大乘運動を推し進めることになる。その結果、教えを伝承するために「書写」が説かれるようになり、大乘運動が舍利信仰を内包すると経巻に対する供具による供養も始まる。常啼菩薩求法譚は「般若經の教理や菩薩行を具体的な人物（常啼菩薩や法上菩薩）に仮託して衆生に示す」という役割を果たし、大乘仏教を在家者に浸透せしめ、在家者を大乘へ誘導する役目を果たした。在家者は求法により見仏聞法が叶うことを知り、無仏の世に仏母たる般若波羅蜜を見出した。常啼菩薩求法譚の構造が整う頃には法身が説かれ、衆生済度、上求菩提の意識もより強くなる。また、般若經典そのものが礼拝の対象としての位置づけを高める。この様に、常啼菩薩求法譚とは大乘仏教が興起し発展していく様子を反映させた物語でもある。

## 〔2〕 審査結果の要旨

『般若經』とは大乘仏教を代表する經典の一つであるが、小部なものから大部なものに至るまで各種存在し多様である。最も古い漢訳として紀元後 179 年訳出の『道行般若經』が存在する。その原本のインドにおける成立はさらに遡ることになる。したがって大乘仏教の成立を探求する上からも注目される經典である。佐伯論文が究明しようとする常啼菩薩求法譚とは『般若經』末尾に位置する常啼という名の菩薩(Sadāprarudita)が般若波羅蜜の教えを得ようとして求法の旅に出、法上菩薩(Dharmodgata)から教えを受けるという求法物語を内容とする。その中には『般若經』が中心的テーマとする「空」「縁起」の思想を説き示し、また『般若經』の経巻供養なども表し大乘仏教の成立史の展開をも知らしめる。したがって、『般若經』研究にとって重要な内容を含めもつものである。これまでの諸研究が、その部分的なものに留まってきたのは、『般若經』が多様で大部なものである故、全貌を把握することが困難であったことが、その理由として考えられる。佐伯論文はこのことを遂行したものである。

## 序論

『般若經』の常啼菩薩求法譚は、同様な構成と内容からなる『六度集經』の常悲菩薩本生と対比され研究されることが行われてきた。それを踏まえ、まず、これら両者の概要を説明している。『六度集經』は 251~280 年の康僧會により訳出され、常悲菩薩の求めに応じ法來菩薩が教えを説くという関係も『般若經』の場合と同様である。『般若經』に関しては、冒頭で言及した通り、大小多様な『般若經』が存在するが、佐伯論文はそれら一つ一つについて丹念に調査している。小品系からは、サンスクリット本、チベット訳を含め『道行般若經』常啼菩薩求法譚を初め他に三本の漢訳を扱い、大品系からは一万八千頌般若、二万五千頌般若それぞれのチベット語訳を、漢訳二本を、さらに十万頌般若からは、玄奘訳(660~663 年)『大般若初会』を扱っている。これまで、これら全てに渡って研究されたものがなく、この意味において本論文は多種多様な『般若經』の常啼菩薩求法譚全般に亘る研

究の必要性に適ったものである。

## 第一章

上で言及した常啼菩薩求法譚を備えている『般若経』に加え、それを有さない『般若経』を合わせると、さらに多様で種々なものとなる。大きくは三系統になり、小品系から大品系へ、さらには十万頌般若へと、それぞれが独自の発展を示し、それは増広であり、綱要化であり、特殊化であったことを端的に示し、この『般若経』の発展史を大乘仏教運動と捉え、またこの三系統の『般若経』において常啼菩薩求法譚が収められることを示し、『般若経』の背景と研究資料の扱いを明瞭に表している。

三系統のうち小品系にはサンスクリット本、チベット訳、漢訳 15 の経典が挙げられるが、その中、常啼菩薩求法譚を有するのは 6 経典である。大品系については、10 経のうち 4 経典に常啼菩薩求法譚が存在する。大品系般若について『出三蔵記集』より訳者、無叉羅に関する記述を示している。よく調査しているが、その漢文の読みに不自然なところが幾分か見え、また読み下しが現代語を交えているところもあり注意する必要がある。『十万頌般若』の常啼菩薩求法譚について言及する中、『大智度論』の記述に注目し、般若経成立史の第二期すなわち増広期(紀元後 100~300 年)に『十万頌般若』が存在していたとし、玄奘による漢訳年代を基準にその成立時期を考えるのではなく、発達史の上から増広期に二万五千頌(大品)系以後、龍樹(ca.150~250)以前の成立と見ることが妥当であるとする点は『般若経』の成立史をよく踏まえての指摘といえよう。『六度集経』の「常悲菩薩本生」について、『六度集経』は康僧會による編集ではないか、あるいはまた康僧會の著作ではないか、との研究報告のあることを示している。この点、何故、『般若経』の常啼菩薩求法譚の成立史研究にとって、従来行われて来た『六度集経』に言及することの必然性の有無についてさらに吟味する必要があるだろう。

## 第二章

『六度集経』の常悲菩薩と法來菩薩との、それぞれの菩薩の階位が新学菩薩と阿惟越致(不退転)菩薩にあるということが、菩薩の階位が二階位のみの時期に相当し菩薩の四階位が出現する以前であること、また『道行般若』において新学菩薩と阿惟越致菩薩とが表される時期と対応していることを述べるが、常悲菩薩と法來菩薩との関係が菩薩の階位そのものの発展時期を表すことと必ず一致するものであるかは、さらに吟味する必要がある。また『道行般若』の常啼菩薩求法譚と『六度集経』の常悲菩薩とのいずれが原型となるかについて吟味し、いずれが原型を示すともいえないとし、共通した原型を想定している。『六度集経』のインド成立が確かであれば、共通した原型を想定することにも意味があるだろう。第四章での『六度集経』における常悲菩薩が三昧中に諸仏にまみえることと『道行般若経』の見十方諸仏三昧(対照表 91)とが共通するとの指摘は有益である。

### 第三章

佐伯論文における独自の調査方法に基づく精密な結果が一覧に表されている。それはサンスクリット本、チベット語訳、漢訳を含む各種の『般若経』十一本の常啼菩薩求法譚と嘱累品とを『六度集経』の相当箇所とに関し 162 の観点から比較対象し一覧にしたものである。長年の調査結果に基づくものであり、他に類を見ないものである。この点、高く評価される。この調査結果に基づく常啼菩薩求法譚の分析が以下の章において表されている。

### 第四章

すべての『般若経』において共通することは、般若波羅蜜の説かれる豪華絢爛たる七宝からなる城壁に囲まれたガンダヴァティー市という場所の設定である。それは人里離れたところ阿蘭若ではなく、人々の多く住む町においてである。このことが指摘されるのは、大乘仏教の背景を知る好材料と見られる。また『道行般若経』「遠離品」から遠離とは阿蘭若にあることではなく法を悟ることにおける遠離であることを示していることも、大乘仏教の特徴を表すものとして説得力がある。他方、その法が説かれる場所としてのガンダヴァティー市の描写は浄土経典である『無量寿経』『阿弥陀経』における極楽の描写と酷似している。さらにその都市において法上菩薩が般若波羅蜜を説く場所の描写と、浄土経典における極楽で無量寿仏が法を説く場所の設定に関しても類似しているといえる。したがって、この点も合わせて考察することは、大乘仏教興起の背景を探究する目的からも必要であるといえよう。さらに小品系般若と大品系般若との常啼菩薩求法譚における内容の相違を二十項目にわけ示している。これは、丹念な『般若経』全般にわたる調査研究の賜物であり、それなくしてはなし得なかったこととして評価される。その大部分は首肯し得るものであるが、次の事柄に関しては再考を要する。弦楽器の音が、種々の原因と条件によって生起する如くに、ブッダの身体も様々な原因と条件によって生起するという仏身の因縁所生に関して、小品系般若にのみその記述が存在し大品系般若には存在しないとするが、『大品般若』法尚品第八十九の中にそれを見出し得る。『般若経典』のみならず、般若波羅蜜自体が諸仏諸菩薩の「母」とされる『大品』の思想も比較対照の着眼となろう。また『大品、小品系般若経』共に「般若波羅蜜を聞くこと」が救済につながることを表しているが、このことも常啼菩薩求法譚対照リストに加えることができよう。さらに『般若経』におけるそのことと浄土経典における「阿弥陀仏の名を聞くこと」が救済につながることを考慮し大乘仏教の興起時における特徴を探ることに可能であろう。したがって、別系統と思われるものも、横軸として類似の現象に注目することも必要であろう。

### 第五章

小品系の最古のものといわれる『道行般若経』に常啼菩薩求法譚が存在し、大品系の最古の漢訳である『放光般若経』にも、それが存在することから、もともと『般若経』には常啼菩薩求法譚が存在していたこと、後にそれが欠落したことを指摘している。他に小品

系では五本のテキストにそれが存在することと大品系には他に三本のテキストに存在することを示している。さらに『十万頌般若経』には後の『初会』にのみ常啼菩薩求法譚が存在し、『二会』『三会』などには、それが存在しないことを表している。これらを述べ知らしめられること自体、広範な調査結果ではあるが、その『十万頌般若経』における常啼菩薩求法譚の存在の有無の事情を探っている。現時点では決定的なことはいえないであろうが、その問題に関し『十万頌般若経』は、小品系大品系般若、その他を総合的に含むものである。現存のテキストには常啼菩薩求法譚が存在しないが、他方、玄奘の見たテキストの『初会』に相当する部分には常啼菩薩求法譚が存在し、それを訳出したと見ることはできないのか。この点については難解ではあるが、さらなる吟味が必要である。

以上の調査研究によるものが佐伯論文であるが、大小様々にして多種多様な『般若経』が存在する故、それらの常啼菩薩求法譚を比較研究することは煩雑を極めるものである。それ故、『般若経』の研究は歴史上、インド以来なされ現在に至る長きに及ぶものであるが、佐伯論文における比較対照による本格的な研究成果はこれまで表されて来たことはない。今後、『般若経』の常啼菩薩求法譚を研究しようとするならば、何らかの形で佐伯論文を参照する必要があるといってもよく、その意味において長期に渡る独創的な研究方法によってのみ導かれ得る成果である。佐伯氏の理解した内容には、一部さらなる吟味を必要とするもの、漢文の読みに留意すべき点が一部あることという欠点もないとはいえない。しかしながら、その成果は全く新しい知見を導いておりこの分野の研究に大きく貢献し得る。

よって本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。